

[特集一第 12 回マレーシア総選挙]

第 12 回マレーシア総選挙概要

塩崎 悠輝（同志社大学大学院）

1. 選挙結果

2008 年 3 月 8 日に投開票が行われたマレーシアの第 12 回総選挙は、与党連合・国民戦線（BN）が連邦下院総議席数の 3 分の 2 を割り込み、5 つの州の州政権を野党が制するという画期的な選挙であった。今回定数が 222 となった下院において、与党連合が 3 分の 2 を割り込むのは、1969 年以來である。下院における BN の議席は 140（選挙前は 198）、野党の議席は合計で 82 となった。下院の野党議席の内訳は、人民正義党（PKR）31（選挙前は 1）、民主行動党（DAP）28（選挙前は 12）、マレーシア・イスラーム党（PAS）23（選挙前は 6）であった。クランタン州議会では、PAS が議席を伸ばして州政権を維持した。他にクダー、ペナン、ペラ、スランゴールでも野党 3 党の州議会議席合計が BN を上回り、これら 4 州で新たに野党連合による州政権が成立した。登録された有権者約 1092 万人中の投票率は、72.2%で、過去の総選挙とほぼ変わらなかった。

連邦下院において、総議席数の 3 分の 2 を割り込むと憲法改正が困難になる。多くの下院議席と 4 州の州政権を失ったことで、アブドゥッラー・アフマド・バダウィ首相は求心力を失いつつあり、困難な政権運営を迫られている。今回の選挙結果の原因とマレーシア政治の今後の展望について検討したい。

2. 選挙結果の原因

下院選において、BN の得票率は 51.4%（前回 2004 年総選挙では 62.5%）であった。ただし、半島部においては、BN の得票率は 49.8%であった。この結果、半島部においては、与野党の獲得議席は BN85、野党 3 党 80 とほぼ拮抗しているのに対して、サバ、サラワクにおいては DAP が各州で下院 1 議席ずつを得ているのみであり、BN が議席を減らすことはなかった。

今回の総選挙で顕著だったのは、マレー人、華人、インド人 3 民族の有権者の投票が BN から野党 3 党へと大きく移行（スウィング）したことである。とりわけ、インド人及び華人のスウィングは前例のないほど大規模であった。下院選での BN への投票率は、インド人は 47%（前回は 82%）、華人は 35%（前回は 65%）、マレー人は 58%（前回は 63%）であった。従って、BN から野党への投票のスウィングは、インド人有権者の間では 35%、華人有権者の間では 30%、マレー人有権者の間でさえ 5%に達した。この結果、華人が最大多数の民族であるペナン州では、都市部華人社会に基盤を持つ DAP が圧勝し、マレー人が最大多数ではあるが華人及びインド人も多いスランゴール州とペラ州、クダー州南部等では野党 3 党が大きく議席を伸ばした。マレー人のスウィングは、クランタン州及びクダー州において PAS が議席を伸ばすには十分であったが、トレンガヌ州政権を奪取するに

は不十分であった。また、スウィングの度合いは、都市部の特に若年層において大きかったと見られ、PKR がクアラルンプール、スランゴール州等で大躍進し、下院における野党第一党となった。

BN は、各民族を代表する諸政党の連合である。前回総選挙までは、多民族の支持を得ることができてきたのは、ほぼ BN のみであり、華人に基盤を置く DAP やマレー人に基盤を置く PAS が勝利できたのは、全国の小選挙区の中でも華人あるいはマレー人が有権者の 80%以上を占める選挙区におおよそ限られていた。複数民族が混在する民族混合型選挙区では BN が有利であり、このことによって、BN は安定した多数の議席を確保してきた。マレーシアの総選挙は、与野党の逆転のような急激な変化をもたらすものではないが、BN の結末が確認されることによって、総選挙が国民統合の機能を果たしていると思われてきたのである。¹しかし、今回の総選挙の結果は、BN が多民族の支持を得てはいないことを示すものであった。統一マレー人国民組織 (UMNO) は、79 議席 (選挙前は 109 議席) へと大きく議席を減らしたが、マレーシア華人協会 (MCA) は 15 議席 (選挙前は 30 議席) と半減し、さらにマレーシア・インド人会議 (MIC) は 3 議席 (選挙前は 9 議席)、マレーシア人民運動党 (GERAKAN) は 2 議席 (選挙前は 10 議席) と壊滅的な打撃を受けた上、両党のコー・ツークン総裁代行とサミー・ベル総裁も落選した。一方で、多民族政党を標榜する野党 PKR は 31 議席 (選挙前は 1 議席) へと大躍進した。

このような選挙結果をもたらした原因として、以下のようなことが考えられる。

(1) 11 月の 2 つのデモ

2007 年 11 月にクアラルンプールで数万人規模のデモが 2 回起こった。野党 3 党と NGO が中心となった「清廉で公正な選挙のための連合 (Bersih)」のデモと BN に批判的なインド人の社会活動家が組織した「ヒンドゥー権利行動隊 (Hindraf)」によるデモである。2007 年の GDP 実質成長率が 6.3%であったことに見られるようにマレーシア経済は総体的には順調であり、アブドゥッラー政権に大きな過ちがあったようには見えない。しかし、これらのデモが起きたことは、アブドゥッラー首相は「指導力が弱く優柔不断な首相」であるというイメージが流布することにつながったと見られる。

(2) アブドゥッラー首相のイメージ

アブドゥッラー首相は就任直後の 2004 年総選挙において、清新で清廉なイメージを有しており、汚職撲滅等の公約を打ち出し、圧倒的な支持を得た。その後、汚職撲滅が進展することはなく、有権者は指導力を発揮して改革を進めることのできないアブドゥッラー首相に失望したと見られる。

(3) 野党間協力の成立

PKR の実質的指導者であるアンワル・イブラーヒム元副首相のイニシアティブにより、ほとんどの選挙区で野党 3 党間の立候補者調整が成功し、その結果野党候補が複数立候補して共倒れすることがなくなった。アンワル元副首相は、野党 3 党の候補応援のため連日各州を周り、毎日 10 ヶ所以上で長時間演説した。PAS も今回の総選挙では従来のようにイスラーム国家樹立を掲げることなく、スローガンとして「福祉国家」や“PAS for All”

¹ 中村正志 (2006) 「分断社会の政治統一マレーシアにおける連邦議会下院選挙の統合機能」『アジア経済』47 (1)、pp.2-35。

を打ち出し、各民族に配慮した公約を掲げた。

(4) 民族問題に関わる要因

デモを指導した後国内治安法 (ISA) で拘留されている Hindraf 指導者らに同情するインド人有権者は多く、野党へ投票することを求める Hindraf の呼びかけは奏功した。一方で、Hindraf を嫌悪するマレー人有権者は、MIC の候補よりも野党のマレー人候補者に投票した。新経済政策 (NEP) とイスラーム化政策の下でマレー人をはじめとするブミプトラのみが優遇されることへの不満は、華人、インド人の間で高まり続けている。

(5) 民族問題と関係のない要因

今回の総選挙では、特定民族だけに関わるわけではない、経済や社会生活に関わる争点が大きく取り上げられた。食品をはじめとする物価の値上がり、選挙後の政府によるガソリン値上げへの懸念、相変わらずの汚職の蔓延、犯罪の増加等の争点に野党 3 党が訴え続けてきたことが成果を挙げ、特に都市部における PKR の躍進につながったと見られる。

(6) マレーシア社会の変容

携帯電話、インターネットの普及、NGO の増大による市民社会の形成といった要因は、徐々に世論形成に作用しつつあり、野党に有利に作用している。マス・メディアを完全に BN が掌握している一方で、野党はこれらの新しいメディアを積極的に活用している。DAP が著名なブロガーを候補者として擁立したところ大量得票で当選、インターネットで選挙資金集めをする、といった新しい現象も見られた。また、選挙前から野党指導者らによるブログ開設が相次いだ。

3. 今後の展望

野党が下院で 3 分の 1 を超える大躍進を遂げて、ペナン州等で野党の州政権が成立したという今回の総選挙結果は、1969 年総選挙に近似している。PKR と DAP は、NEP からの決別を唱えており、PKR と DAP を中心とする新州政府に反発する UMNO 活動家たちは、ペナンやスランゴールでデモを繰り返しているが、現在 (3 月 20 日) までのところ、野党側の抑制と警察の取り締まりもあって、与野党が街頭で衝突するという事態は発生していない。

UMNO は 2008 年中に人事改選を含む年次党大会を行うが、アブドゥッラー首相後も見据えて UMNO 内で駆け引きが活発化している。マハティール前首相、今回初当選したマハティール前首相の子息であるムクリズ・マハティール、トゥンク・ラザレイ元財務相らは UMNO の抜本的改革を主張してアブドゥッラー首相の退任を求めている。3 月 18 日、アブドゥッラー首相は組閣を行い、新内閣を発足させたが、新内閣で閣僚に任命されなかったラフィダ・アジズ前国際貿易・産業相兼 UMNO 婦人部長をはじめとして、組閣人事に不満を持つ有力政治家も多いと見られる。

議席を大きく減らした MCA、MIC、GERAKAN 等の BN 構成党は、華人、インド人の支持を取り戻していくことが喫緊の最重要課題である。サバ、サラワクの諸政党は、総選挙の結果 BN 内での比重を大きく増やしたことになるが、半島部の BN 構成諸党と野党 3 党が拮抗しているという状況にあっては、与野党の間でキャスティング・ボートを握っているという見方も可能である。

新たにクダー、ペナン、ペラ、スランゴールにおいて州政権を成立させた野党 3 党は、州行政を巡る連邦政府との軋轢も予想され、同時に、野党間で協調しつつ州行政の運営で業績を挙げていけるかどうかは課題である。特に、DAP と PAS は従来から政策の相反することが多く、ペラやスランゴールでは両党が協調していけるかどうかはポイントである。

第 12 回総選挙の結果、BN の長期政権の下で問題は抱えつつも安定して経済成長を続けてきたマレーシアに全く新しい可能性が示された。政治も、民族間関係も、経済政策や教育政策も、今後多かれ少なかれ変化を迫られる。BN の新しい枠組みや BN ではない政府の可能性もすでに開かれている。今後、民族間関係に関わる危機に陥ることなく、マレーシアが大きな変化を遂げていくか否かが問われている。